

病気の表現活動にみる「生きづらさ」を抱える人々の生存技法

杉本洋(新潟医療福祉大学)

病気を持つ人々は、疾病の管理のみならず、社会的な困難ごとをやりくりし、時に病気を意味づけながら日々の生活を送っていることが示されている (Strauss and Corbin 1984)。病気の持つ人の多様な経験が明らかになっている中、虐待や戦争、災害といった体験のみならず、がんや精神疾患などにおいても被害者や患者というより、力を持った存在としての生存者 (サバイバー) として対象者をとらえなおそうとする動きが出てきている (Evans and Sullivan 1995)。障害や病気を持つ人々たちのつながりに関しては、自助グループや障害者の権利復興運動などにみられるように回復を目指し、明確な社会変革の意図をもって社会に働きかけている動きがある。また、病気を持つ人々の表現や芸術としては、べてるの家の幻覚妄想大会などがユニークな取り組みとして知られ注目を浴びているもの (浦河べてるの家 2005)、芸術・表現活動は機能回復のための有効な療法としての意味合いが強いのが現状である。

本研究は、新潟市を活動の拠点とする2つの、病気や生きづらさを表現する活動 (K-BOX、こわれ者の祭典) から、表現者の生存のあり方、技法といった英知を明らかにしようとするものである。具体的には表現活動へのスタッフ・客としてのかかわりから、表現者達がいかなる経験をし、いかに回復してきたのか、という表現活動の中で語られる内容を分析し、回復もしくは人生の再構成、創造という人生の航路の多様さを示す。次に、活動に関連する人々のありよう、顕在化しにくい表現者たちの思いや価値観などをみつめ、表現がなされる背景を探るとともに、病気観を含む社会からのまなざしや、いかなる医療や福祉といった言説との関係の中で表現活動が行われているのかを分析する。

表現者たちは、ひきこもりや心の病いなどの病気の経験を持つと同時に、病気や人生を肯定していくなどの回復者としての側面を持ちながら、経験を時にユーモアを交えて語り、音楽やパフォーマンスなどの芸術的な手段を通して表現する。保健医療や支援の枠組みで病気を捉えるうえでは、病気を問題化し、その解決に向かうべく手を差し伸べる、問題の原因を除去するという観点が重要視されるが、本活動においては、病気の過酷な体験をパフォーマンスの中で表現するが (病気が直接表現されない芸術活動もなされるが)、その中には病気を肯定する内容が多々見受けられる。また、表現者は、病気を持つ弱者という側面は表現活動の場では強調されず (かといって果敢に克服したという強者というわけでもなく)、病気を問題化し、除去・克服しなければならないものとしても語られる様子はあまり見受けられない。こうした人々による活動は、結果としてもたらされることはあるにせよ自らが回復するための自助グループや、療法としての活動や権利復興運動とは趣を異にしなが、当事者性を強く持ちながらも、例えば自殺防止を訴えるような個々や社会への切実なアプローチとともに、芸術や保健医療の世界へ少し視野を広げられるような作用を及ぼしう特徴を持つものであり、それは表現者たちの「生きづらさ」を生き抜く技法のひとつであるように思われる。また、病気や伴う体験などそれぞれの表現者が表現する内容は、一般的には恥心、もしくはトラウマティックなイベントと考えられやすく秘匿されやすい性格を持つものも含まれ、そうした体験を表現することは病気を経験しつくす営みの一環であるようにも思われる。病気を芸術的な手法を用いて表現するさまにおいては「生きづらさ」から創造する生存者のありよう、そして強固な保健医療および社会的なまなざしに風穴をあけるような手法を見いださう。

【参考文献】

- Evans, K., Sullivan, J.M., 1995, Treating Addicted Survivors of Trauma, The Guilford Press.
Strauss, A. L., Corbin, J., Fagerhaugh, S., et al. eds., 1984, Chronic Illness and the Quality of Life (Second Edition), Saint Louis: C.V. Mosby Company.
浦河べてるの家, 2005, 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院。

【 病気、表現活動、生きづらさ、生存者 】